

「畏」について学びつつ、「畏」について問い返した二十五分間

高野 吾朗

私の基調報告は二部構成のスタイルを取っていた。まず前半部では、「この本から一体どのような研究姿勢を具体的に学ぶことができるのか」という点に主眼を置いてみた。その上で、この本から幾つかの「主要キーワード」と思しきもの（および、それらにまつわる文章群）を適宜抜き出すことにより、作品の全体像を手早く概観（および再確認）してみようとした。一方、報告の後半部においては、シンポ後半の公開討論を頭の片隅に置きながら、この本の「問題点」らしきものを試しに俎上に上げてみた。あえてそうすることにより、著者本人および他の研究会参加者たちからの具体的反応をできうる限り誘い出してみようとしたのである。これら前半・後半部の具体的内容は、以下の通りである。

（前半部の内容）

私が川口氏の著作の「主要キーワード」として選んだのは、次の八つのフレーズである。

- ① 「分割線」「二項対立」
- ② 「想像力」
- ③ 「被爆ナシヨナリズム」
- ④ 「畏」「別の抑圧や忘却」

⑤ 「横領」「死者の動員」

①の二語が具体的に示しているものとは何か。その答えは、例えば次の引用などに明示されている。

被害者／加害者という分割線を意識的に挿入することは、現実の様々な局面において、戦略的にも道義的にもそれなりの意味がある。それは否定し難い。しかしながら、ひとたび分割線が固定されるやいなや、その先に出現するのは、自己憐憫と他者への不寛容に満ちた閉鎖的な共同性ではなかるうか。（P5）

原爆に関する言説の歴史の中で、「被害者」対「加害者」といった紋切り型の「二項対立」構造は一体どのようにして生まれ、どのようにしてこれまで維持され続けてきたのか。今、その「分割線」上では、いったい何が起きているのだろうか。そして、この「分割線」の思想を、いったい我々はこれからどのようにして乗り越えていけばよいのか。「被爆者／非被爆者、非日常／日常、異常／平常、記録／虚構、政治／文学」といった多様な対立軸が折り重なる原爆文学という問題領域^{プロブレマティク}でうごめく、記憶の政治性を検証する試み（P16～17）の重要性を川口氏はまず力説する。「二項対立の遂行的構築こそが、原爆文学というジャンルを領域化した」（P23）という歴史的事実をよくよく踏まえた上で、そして、自分自身が依拠している原爆文学という研究領域の基盤それ自体をもはや切り崩してしまっても全く構わないくらいに必死の覚悟で、川口氏はこれらシンプルな対立の構図たちそのもののさらなる混沌化にあえて挑んでいるのである。この挑戦的な姿勢は、原爆文学に興味を持つ多くの読者の心を、間違いなく

驚掴みにするであろう。

②の「想像力」はどうやら、川口氏が愛してやまぬ言葉の一つのようである。なかでも彼が特にこだわっているのが、「加害者」たる自分自身を想像する力の重要性である。

「加害者への想像力」とは、自分の存在自体が赦しがたき他者、すなわち誰かにとつての加害者であるかもしれないことに、とことん思いを巡らすことなのだ。(P11)

戦時に冒した自らの加害者ぶりについてはひたすら目をつぶっておきながら、自らが受けた被害の有様についてはこれでもかとはばかりに嘆きまくる、という行為は、「想像力」など大して持ち合わせていなくとも、いたつて容易にできてしまうポーズであろう。川口氏は、「加害者への想像力」に欠けていると思しき過去の有識者（＝原爆文学という領域構築に何らかの形で大きく関わってきた人々）の発言に再度光を当てなおし、その問題点を一つ一つ、あらためてクローズアップしていく。例えば、大江健三郎氏の「外国人として（在日：高野補足）朝鮮人を認めるといのがほんとうだ」という一九六一年の発言に対しては、

「外国人」である朝鮮人が、いまなぜここに住んでいるのか、住まねばならなくなつたのか、といった歴史的経緯への想像力を、哀しくも決定的に欠如させているのではないか（中略）ここに垣間見られるのは、戦後日本という社会空間の自明性を問うことなく、そこに自身の言説の足場を置こうとする無邪気な姿勢であろう。(P78～79)

と切り返しているし、近年大ヒットした原爆マンガ『夕風の街桜の国』（二〇〇七年には映画化もされた）の著者・こうの史代氏

が映画の公式ブログの中で「後世に伝えたいものは『美しい日本語』と発言した件に関しては、「皮肉も交えず無邪気に」語っているとしか思えない発言だ、とした上で、次のように問い返す。

「昭和」において、「美しい日本語」がどれほど抑圧的、暴力的に働いたのか、灰燼と化した軍都広島でもそのような場面が無数に存在したのではないのか、といったことは微塵も想像しないのか。(P216)

川口氏のこうした声を安易に無下にしてしまうような読者は、次の引用に対しても、おそらくは全くもって無反応のままのはずである。

自分たちの苦難の物語の裏側には、自分たちとのあいだで因果律を形成するもうひとつの物語が同時並行的に進行している（ことに思いをめぐらす想像力：（中略）こうした想像力を抜きに、国民国家の物語の枠を越えることは不可能だろうし、そこから派生して立ち上がる加害と被害という二項対立の言説の呪縛からも逃れることはできないであろう。(P130)

「加害者への想像力」を喪失した末に生まれかねない原爆関連の独特の思想、それが、川口氏の深く憂慮する③「被爆ナシヨナリズム」である。これは、原爆文学という領域の創生以来、多くの表現者や研究者の心の中に長らくつきまとつてきた考え方でもある。「インターナシヨナルなナシヨナリズム」の旗のもと、朝鮮人被爆者の表象の不在を深く嘆いたとされる長岡弘芳氏（一九七三年発表の『原爆文学史』著者）でさえ、川口氏によれば、「戦前の植民地体制についての内省を欠いた『唯一の被爆国』なるナ

ルシステイックな自己表象」(P43)から完全に自由ではなかったのである。そんな「自己表象」のありようを、「自分自身の内部の問題」(P42)として「自身の言葉をもつて震撼させること」(P43)こそが、川口氏の目指す原爆文学研究の本来の姿の一つなのである。

「被爆ナシヨナリズム」の芽となりえそうな表現活動一つ一つに対し、川口氏が昂然と向けていく批判的視線はなかなか辛辣であり、読む者の居住まいさえをも思わず正してしまうかのごとき勢いである。例えば、『夕風の街 桜の国』のキャッチコピー「広島のある日本のあるこの世界を愛するすべての人へ」に対しては、以下のように挑みかかる。

広島記憶の世界化、原爆の記憶の普遍化を装いつつ、その実、「唯一の被爆国」というナシヨナルな潜在的感情に訴えかけようとしている側面は無視できない。(P118)

一方、この「ナシヨナリズム」にあえて物申しているような過去の表現活動に対しては、その歴史的意義をまずはしっかり付けようと試みている。そうした表現活動の代表例は、何といっても「原爆は落とされるべきだった」という、元長崎市長・本島等氏によるかの有名な発言であろう。

その挑発的言辞の真の狙いは、加害の認識と謝罪の徹底を通して原爆観の落差を埋めること、そして何よりも被爆体験の特権化による被爆ナシヨナリズムの解体にこそある。概して本島発言の批判者の多くは、本島が挑んだ被爆ナシヨナリズムの解体という点については、見落とすかあえて見ようとしなかった。(P164)

ただし、こうした「解体」作業に強く共感しつつも、川口氏はその作業自体に潜む④「罨」についても警告を発することを決して怠つてはいない。すなわち、「別の抑圧や忘却」という名の「罨」である。

それでもやはりやっかいに思うのは、抑圧された他者の存在を歴史の舞台に登録しようとする記述行為が、それを表象したと思われる瞬間に、別の抑圧や忘却を遂行してしまうことである(中略)加害者性の「発見」というもつともな言説さえも、種々の抑圧や忘却に手を貸すことさえあるのだ。(P67)

本島発言は彼が解体を狙った被爆ナシヨナリズムを、その挑発的姿勢を裏切るようにして、再編成してしまっている。冷戦体制崩壊と急速なグローバリゼーションによる社会の流動化現象を背景に登場した、小林(よしのり：高野補足)が煽動するような裾野の広い現代日本のナシヨナリズム言説の構築には、はからずも手を貸してしまっているときえいえるのである(中略)欧米中心主義的な傲慢不遜な力の存在を黙視して、ひたすら謙虚に自己批判に徹することは、それがひとえに良心や善意から発せられたものであったとしても、畢竟現前する不均衡な世界秩序を容認し、ただただ強化するだけのことである。(P167、168、169)

大江健三郎氏の代表作の一つ『ヒロシマ・ノート』も、川口氏から見れば、似たような「罨」に陥っているかのごとく映る。

だがやっかいなのは、こうした『ヒロシマ・ノート』のような：高野補足)周縁化された者への配慮に満ちた、過去への

反省的な行為としての反忘却の営みにさえ、自己防衛のナルシズムが滑り込んでしまうことにある。(P8182)

(大江氏の『ヒロシマ・ノート』中の被爆者像は：高野補足)ともすれば「日常のおぞましさを捨象した聖地広島島の聖なる人間として美化」され、彼我の本質的差異を実定化、固定化する危うさを孕んでもいた(中略)被爆者＝被害者という認識枠を強く召還(再強化)するものでもあった(中略)被害者の位置から発せられる語りが特権化＝正典化されていく過程とは、それとは異なる別の語りを、誠実さなどを理由に不可視の領域へと排斥する過程でもある。(P181)

原爆をこれから表象しようとする者、あるいは、そうした表象をこれから観賞しようとする者に向かい、川口氏の本書は、「他者との関係を取り結び他者の記憶を甦らせようとする、そのつどそのつどの地点においてその試みをナシヨナリティ＝共同性の語り口に回収しようとする巧妙な罠が仕掛けられていること」(P98)をゆめゆめ忘れてはならない、とひたすらに説き続けていく。そうした視点を有しているからこそ、ヒロシマの加害者性に真摯に目を向けた被爆詩人・栗原貞子氏の代表作「ヒロシマというとき」に対してさえ、

アメリカが「パール・ハーバー」をもってする原爆投下正当観、さらには第二次世界大戦の経験をも「自由・民主主義」対「ファシズム」といった史観で一元化する立場について、「ヒロシマというとき」は有効な批評を有さないということである。原爆被害を語る場で、アジアへの加害責任を発しようとする

する(加害と被害の複合的自覚)は、その出発にあったアメリカとの出会いを忘却、隠蔽することによって、表現化されたのである。(P197)

という形での批判的考察が鋭く行えてしまうのである。

最後の「主要キーワード」である⑤「横領」「死者の動員」の二つは、前述の「罠」にはまってしまった言説が安直に行ってしまいかねない、いわば罪の側面を指す言葉として、もっぱら本書の後半部分に時おり登場してくる。原爆のリアルさを描くことにあえて背を向け、あくまで「穏やか」にあの時のヒロシマをマンガ化しようとした『夕風の街 桜の国』の路線にさえ、川口氏は一つの「横領」を見出さずにはおかない。マンガの舞台たる「原爆スラム」の描かれようと、実際の「スラム」の歴史とを具体的に比較考量することにより、前者の中に「在日朝鮮人」の存在を隠蔽せんとする姿勢を見出す川口氏は、それを「被爆都市の記憶の横領といった事態」(P126)としてさらに問題化していくのである。その上で川口氏は、このような「横領」行為が戦争体験者たち一人一人の物語に今後もたらしていくであろう問題点を、以下のごとくに総括する。

体験者の消滅とは、「否」を突きつける存在の表舞台からの退場を意味するとして、そうした事態が歴史に向き合う「緊張感」の喪失へと墮するのであれば、歴史(記憶)の横領といった事態があちこちで横行しよう(中略)「伝えねばならないのなら伝えましょう。だけど私の勝手な物語をね」と。

川口氏が本書の中で、福岡良明氏の『反戦』のメディア史く(P141~142)

戦後日本における世論と輿論の拮抗」（世界思想社、二〇〇六年）や、吉村和真氏・福岡良明氏の両名編集による『はだしのゲン』がいた風景（マンガ・戦争・記憶）（粹出版社、二〇〇六年）といった研究書をわざわざ取り上げ、「補論」と称してこれら二冊の書評を大々的に行ったりしているのは、この両研究書がどちらも、戦争や原爆の歴史（記憶）の「横領」に対して独自の抵抗を示そうとしているからなのである。まるでそれは、川口氏なりの「同志に対するエール」であるかのようでもある。

「横領」を犯してしまいそうな主体が、戦後六十年以上を経た今この時を生き抜き続けている我々であるとするならば、もっとも容易に「横領」されてしまいそうな主体とは、他ならぬ、戦争で逝ってしまった物言わぬ人々の声であり、原爆で亡くなってしまう沈黙の人々の心の真実であるといえる。ヒロシマの死者の声に真摯に耳を澄まそうとしてみたり、その声の力にすがりつき、何かを期待してみようとしてみたり、さらにはその声を自力で再現しようとしてみたりさえする表象行為は、多様なメディアが氾濫する今、すでに我々の周りに無数に存在している。そうしたせつかくの善意の表象行為を、「死者の記憶、死者の痕跡を生者がおのれのアイデンティティ構築に利用する」（P227）といったエゴイステックなものへと簡単に貶めてしまいういかにも日常的な危険性を、我々は常に自己点検していかねばならぬはず、と川口氏は問いかける。さもないと、いかなる原爆関連の言説を用いて生者と死者の「交霊」を図ろうとしたところで、「それはもはや、都合のよい死者の動員に過ぎない」（P228）破目へと墮してしまふことになる……遵守し続けることが実に難しそ

な、非常に厳格な教訓ではあるが、それでも傾聴に値する発言であることは、どうやら間違いなさそうである。

（後半部の内容）

では一体、この川口氏の著作それ自体に全く問題点は存在しないのだろうか。読してもっとも気になったのは、作品における川口氏の自己言及の仕方であった。

かくいう私こそ、「まやかしの連帯」を欲する者の端くれかもしれない、といった絶望じみた懼れから自由ではない。

（P7）

死人に口なし。いや、死人の口を借り受けて魑魅魍魎が唱和する光景。「原爆文学研究」を当面の看板に掲げる私にせよ、決してその外部に立つてはいない。

（P142）

「被爆ナシヨナリズム」という名の「まやかしの連帯」や、「死者の動員」がなおも跋扈する今の言論状況から、自分はまだ完全には脱し切れていない……という形で、「自責の念」が吐露される箇所が、本書中にはちらほらと点在している。だがその一方で、一体どの程度「まやかしの連帯」を川口氏自身が「欲して」しまっているというのか、どのくらい「外部に立つていない」というのか、その具体的な程度に関しては、本書はほとんど明かしてくれない。その点については全くといっていいほど自己言及しないまま、前述の手短な言い訳まがいの吐露のみを残して終わっているのである。「畏」や「横領」に常に目を光らせる、原爆文学のいわば「ゲートキーパー」の特権性を自らに対してここまで付与しておきながら、自分自身の「まやかし」の部分、自分自身の「内

「部性」については、できるだけ見せないように計算しながら書き進めたのではないか……そんな疑念が読後感の中に少々混じった。原爆文学を語る際、「畏」にも「横領」にも汚されずにここまで語れるのはこの世の中で私だけ……私はこれまで、そんな「畏」や「横領」なんかにはまったことなど実は一度たりとてないのだ……といったような書き手の「外部性」の豪語が図らずもイメージされてしまったのである。かくして標榜された著者自身の「外部性」のおかげで、この本には微妙な独善性がどこかまわりついているようにも感じられたのである。

さて今度は、次なる四つの引用を讀んでみて頂きたい。どれも皆、川口氏自身と従来の「原爆を語る言葉」との関係性を描写した部分である。なお、傍線は全て高野による。

いま模索されるべきは、原爆文学が領域化されるプロセスにおいて人々が真摯に語った戦後のヴィジョンを丹念に再構成しながら、なおかつ、出来事としての記憶を掘り起こすことによって、現在の論者自身をも拘束する知と感性を問い返すような実践ではなからうか。(P 47)

私の取り組む「原爆文学研究」も、独特の様態で畳み込まれることで私を拘束しつづける戦後日本への再審のつもりだし……。(P 58)

原爆の記憶の問題化を通しての戦後日本の再審といった課題は、そうした関係性の渦に自覚的に身を投じつつ、しかもそれに拉致されないように思考することではか達成されないだ

ろう。(P 63)

常に顕在化してきたのは、冷戦終結後のグローバルゼーションの中で練り広げられる国民国家の幾重にも入り組んだ共犯関係の構図である。そのような構図から原爆を語る言葉をどのように救い出したらよいのか、そもそも救い出すことができるのか。(P 99)

本書において川口氏は、どうやら自己の立ち位置を、常に「拘束される」(あるいは「拉致される」)身とみなしたがっているようである。しかし、本当にそれだけでいいのだろうか。この本を書いて世に問うことにより、川口氏自身もある意味、他人の(原爆と文学に関する)思考を「拘束する」側に回ってしまったのではないだろうか。拘束された言葉を「救い出す」といったヒロイックな自己像を押し進めていくのももちろん大切であろうが、この本の中の自分自身の「言葉」がどのくらい他者を「拘束する」ことになるのか、その可能性に関する自己内省のありようについても、川口氏はこの本の中で読者に対してもっと暴露する必要があるのではないか。

小沢節子氏の研究書『原爆の図』(描かれた(記憶)、語られた(絵画)) (岩波書店、二〇〇二年)が見せる「原爆の図」分析に対し、川口氏は

七〇年前後をひとつの到達点のように設定し、そこにおのれの発話の位置をあわせるようにして、初期「原爆の図」の「再発見」を試みようとした著者自身の欲望を、自らの手で歴史の解剖台に載せてしまうような、自虐的な試みが不可欠では

なかつただろうか。

(P 67~68)

と述べたりしているが、川口氏のこの本そのものは、一体どれほど「自虐的」になれているというのだろうか。他人の作品の「抑圧」や「隠蔽」のありようをあれほどまでに執拗に突いたからには、本書はもつと「加害者たる」自分自身についても「想像力」を働かせてみるべきだったのではないか。

同様に気になったのが、川口氏がこの本の中で行っている暗黙の序列化である。原爆にまつわる言説の優劣を決めるのがこの本の主目的なのではない……といった、いかにも論文的な逃げ口上が本文中にたびたび周到に施されているが、そういう文体を隠れ蓑にしながら、この本はやはりどこかで、過去の原爆表象者たちの序列化を行っていないだろうか。

ヒロシマからの政治的告発をあえて断念するとともに、死者の声を代弁する行為を不遜だと一蹴した詩人・石原吉郎氏。戦争において何が語りえないものなのかをちゃんと自覚していたらしき詩人・山田かん氏。マイノリティたる在日朝鮮人被爆者の声を正しく聞き取れなかつた自分自身の不安や揺らぎにきちんと対応しようとしていた作家・石牟礼道子氏。そして、「にももかかわらず」という逆説の論理で日本の加害者性と被害者性とを結びつけつつ独自の思考を深めていった原水禁運動家の被爆者・岩松繁氏——これら四名については、川口氏の評価はどうやら「優」のようである。一方、大江健三郎氏と栗原貞子氏と本島等氏の三名に關しては、どれも少々問題含みの「良」評価のようである。そして結局のところ、「落第」扱いされているのは『長崎の鐘』とともに著名な医学博士・永井隆氏とこの史代氏の兩名のようであ

る。このようにある種の序列を形成してみる事それ自体に問題があるわけでは決していないが、原爆文学という領域の生成プロセスにおいて井伏鱒二氏の『黒い雨』の評価が急上昇していき、原民喜氏や大田洋子氏の作家的価値がどんどんと降下していった……という序列の歴史的図式を本書の前半であれほどまでに批判的に考察していた川口氏が、本書中で自らがなさんとしている新たな暗黙の序列化については何にもコメントしないままでいるのが、読んでいてどうにも心にひつかかった。こうした川口流の序列化をこの本を通じて知ってしまうことにより、今後の原爆文学研究者たち（あるいは、原爆に關してこれから芸術作品を制作しようとしている者たち）の想像力がどこかで制限されてしまうような可能性は本当にならないのだろうか。この新たな序列の中でたまたま「優」と目された人間たちの表象中にも、実は「落第」部分がありはしないだろうか。逆に「落第」扱いされた者たちの表象中にも、「優」の部分がありはしないだろうか。論文としての体裁を整える関係上、あえてこうした別側面を過小評価し、排除したりはしなかつたか……こうした一連の個人的疑問を、直接著者本人にぶつけてみたのが、私の基調報告の後半部の主旨であった。

とはいえ、実はこれらの問題点は、川口氏たった一人のものなどでは決してなく、どちらかといえば、原爆や戦争についてこれから何かを語ろうとしている我々全員が等しく共有しているものなのである。その意味で、シンポの席上、川口氏に投げかけたこれらの疑問は、返す刀ですかさず私自身の立ち位置をも揺るがせたし、私自身の今後の物言いさえをも束縛するほどの力を十分に有していたのである。